

ポルティナリ家－点から線へ、そして多次元に

藤原 道夫

ポルティナリという名を初めて知ったのは、フィレンツェのウッフィツィ美術館で「ポルティナリの祭壇画」をみた時だった。「牧者の礼拝」を描いた三連祭壇画はイタリア・ルネサンスの巨匠による絵画と並んで展示されている。画家の名はファン・デル・フース、解説にフランドル絵画を代表する作品とあった。これが一つの点となった。

ある年の冬、ベルギーの古都ブルッヘ（ブルージュ）を訪ねた。二度目で街の概念図は掴めており、駅から歩ける距離にあるホテル・ポルティナリに宿をとった。そこが二つ目の点だった。

二つの点は、15世紀メディチ銀行のフランドル支店長を務めたトマーゾ・ポルティナリによってつながられる。

ブルッヘは往時ハンザ同盟の港として繁栄しており、フィレンツェの経済力がここにも及んでいた。現在ホテルになっている屋敷に住んでいたトマーゾがフースに祭壇画を注文し、絵をフィレンツェに持ち帰ってサンタ・マリア・ヌオヴァ病院にある自家の礼拝堂に飾った。病院はトマーゾの先祖が施療院として自家の財力により創設した。祭壇画が公開されるとたちまち評判になり、レオナルド・ダ・ヴィンチも影響をうけたとされる。

後年この病院の地下室でダ・ヴィンチは人体を正確に描く目的で死体解剖を行い、芸術的にも優れた素描集『解剖図』を残した。近代解剖学の幕開けだった。円の中に4つの腕と4つの脚が描かれている「ウィトルウィウ人体図」は多くの人がどこかでみているはずだ。素描はレンブラントが描いた「テュルプ博士の解剖学講義」の中にもひき継がれているように思う。

ポルティナリ家を遡ると、13世紀にベアトリーチェが出ている。ダンテは彼女を「永遠の淑女」と敬い、二人の出会いを『新生』に衝撃的な思い出として書いた。『神曲』の中では、夭折した彼女が迷うダンテを天国へと導く役割を果たしている。

事実の関連には際限がない。そんな中で、思いがけないことが繋がっている一例を記した。長い時間をかけて新たな発見をしたような喜びも味わった。今後もさまざまな分野で新たな多次元的な展開がみられることを楽しみにしている。